

高原町文化財調査報告書 第4集

高原町埋蔵文化財発掘調査報告書

ひ もり
日守地下式横穴墓群
おおたに
大谷遺跡表採縄文土器資料

1999. 3

宮崎県西諸県郡
たか はる ちょう
高原町教育委員会

高原町埋蔵文化財発掘調査報告書

ひ もり
日守地下式横穴墓群
おおたに
大谷遺跡表採縄文土器資料

1999. 3

宮崎県西諸県郡
たか はる ちょう
高原町教育委員会

序 文

埋蔵文化財の保護・活用につきましては、日頃より深い御理解をいただき、厚く御礼申し上げます。

このたび高原町教育委員会では、個人の造成工事に際し発見された日守地下式横穴墓群の発掘調査を行いました。調査地区からは、町内初の蛇行剣などが発見され、大きな成果を得ました。又、町内でも早くから縄文時代の遺跡として認知されていた大谷遺跡についても、表採の土器についてはありますが、その遺跡の内容の解明について大きな成果を得ることができました。

今回の調査で得た様々な成果が、学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場で活用され、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解の一助になることを期待いたします。

最後になりましたが、この発掘調査にあたり、御理解をいただきました土地所有者の方々をはじめ、御指導・御援助をいただきました関係諸機関並びに地元の方々に、心から御礼を申し上げます。

今後とも、本町の文化財行政に対する御指導・御協力をいただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

平成11年3月

高原町教育委員会

教育長 正入木 久 男

例 言

1. 本書は、高原町教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 掲載しているのは、縄文時代1件、古墳時代1件、計2件についてである。
3. 調査関係者は、次の通りである。

調査主体

高原町教育委員会

教 育 長

社会教育課 課 長 (平成8年度)
(平成9年度)

係 長 (平成8年度)
(平成9年度)

調 査 員 社会教育課 主 事

正入木 久 男

益 本 忠 男

増 田 賢 一

森 山 博 文

篠 原 弘 二

大 學 康 宏

調査指導

宮崎県教育委員会

文 化 課 係 長 (平成8年度)
(平成9年度)

主 査

面 高 哲 郎

北 郷 泰 道

石 川 悦 雄

永 友 良 典

4. 本書の執筆・編集は大學があたった。
5. 本書で使用した方位は、全て磁北である。
6. 調査の記録類、出土遺物等は、全て高原町教育委員会で保管している。

総目次

I. 日守地下式横穴墓群（97-1号墓、97-2号墓）	1
II. 大谷遺跡表採縄文土器資料	41

ひ もり
日守地下式横穴墓群

(97-1号墓、97-2号墓)

例 言

1. 本書は、高原町教育委員会が実施した、宮崎県西諸県郡高原町大字後川内字日守10-1に所在する日守地下式横穴墓群97-1号墓、97-2号墓の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、高原町教育委員会が主体となり、平成9年2月14日から同年3月7日の延べ12日間実施した。
3. 本報告書に使用した図面及び写真について、調査に伴う測量については、その一部を赤塚光一氏（現 ジパングサーベイ代表取締役）の協力をいただいた。又、出土した鉄製品のうち、蛇行剣と鉄鏃4点については、宮崎県埋蔵文化財センター主事和田理啓氏の協力をいただいた。その他の図面・写真については、大學が作成・撮影した。
4. 周辺地形図については、平成9年8月におこなわれた、天理大学教授置田雅昭氏による電気探査において作成された図面を、置田氏の承諾を得て使用している。又、その成果についても、同氏の承諾を得て附編として掲載している。
5. 出土した遺物は、全て高原町教育委員会で保管している。

本文目次

例言	2
本文目次	3
挿図目次	3
表目次	3
図版目次	4
第I章 はじめに	
第1節 調査にいたる経緯	5
第2節 調査の組織	5
第3節 遺跡の歴史的環境及び調査状況	8
第II章 調査の成果	
第1節 調査の概要	10
第2節 調査の結果	10
1. 97-1号墓	10
遺構	10
遺物	12
2. 97-2号墓	15
遺構	15
第III章 まとめ	
第1節 遺構	17
第2節 遺物	17
第3節 結語	17
附編 宮崎県高原町日守地下（立坑）式	
横穴墓群のレーダ探査・補遺	21

挿図目次

第1図 遺跡位置図及び広域周辺地形図	6
第2図 日守地下式横穴墓群現状地形図	7
第3図 日守97-1号地下式横穴墓遺構実測図	11
第4図 日守97-1号地下式横穴墓出土遺物実測図	13
第5図 日守97-2号地下式横穴墓遺構実測図	16

表 目 次

第1表 日守97-1号墓出土鉄器計測表	19
---------------------	----

図 版 目 次

図版 1	調査前状況	35
	調査前状況(97-1号地下式横穴墓)	
	97-1号墓竖坑検出(1)	
図版 2	97-1号墓竖坑検出(2)	36
	97-1号墓竖坑土層断面状況	
	97-1号墓竖坑完掘状況	
図版 3	蛇行剣出土状況	37
	剣出土状況	
	鉄鏃出土状況	
図版 4	97-2号墓竖坑検出状況(1)	38
	97-2号墓竖坑検出状況(2)	
	97-2号墓羨門閉塞状況	
図版 5	97-1号墓出土遺物	39

第1章 はじめに

第1節 調査にいたる経緯

日守地下式横穴墓群は、高原町と北諸県郡高崎町との町境に位置し、標高約200mの小高い丘を中心に立地している。南に道路一つ隔てた高崎町大字前田字仮屋尾でも地下式横穴墓が3基発見されており、町名こそ違うものの、日守古墳群という一群を構成しているものと思われる。

平成9年1月26日、当時の高原町長横田修氏より担当者に地下式横穴墓が発見されたとの連絡が入った。詳細を聞くと、町長の知人である花牟礼信夫氏が苗木を植えるため、高原町大字後川内字日守10-1の原野を造成したところ、玄室部分が陥没し、発見に及んだということであった。早速遺跡発見の手続きをとり、同氏と協議したところ、事業継続の意向があった。又、地下式横穴墓は普段密閉されているため、一度開口すると内部が崩壊してしまうという点で、保存は困難と判断し、記録保存の措置をとり、発掘調査を実施した。ところが、今回発見された玄室の竪坑を検出するため、その東側にトレンチを設定したところ、トレンチの南端より別の竪坑が検出された。再び同氏と協議したところ、新たに発見されたところについては、玄室が隣の畑地の法面に食い込んでおり、造成を実施すれば法面が崩壊する恐れがあるため、現状のまま当面保存することとなり、竪坑及び閉塞状況のみ確認し、その後埋め戻した。

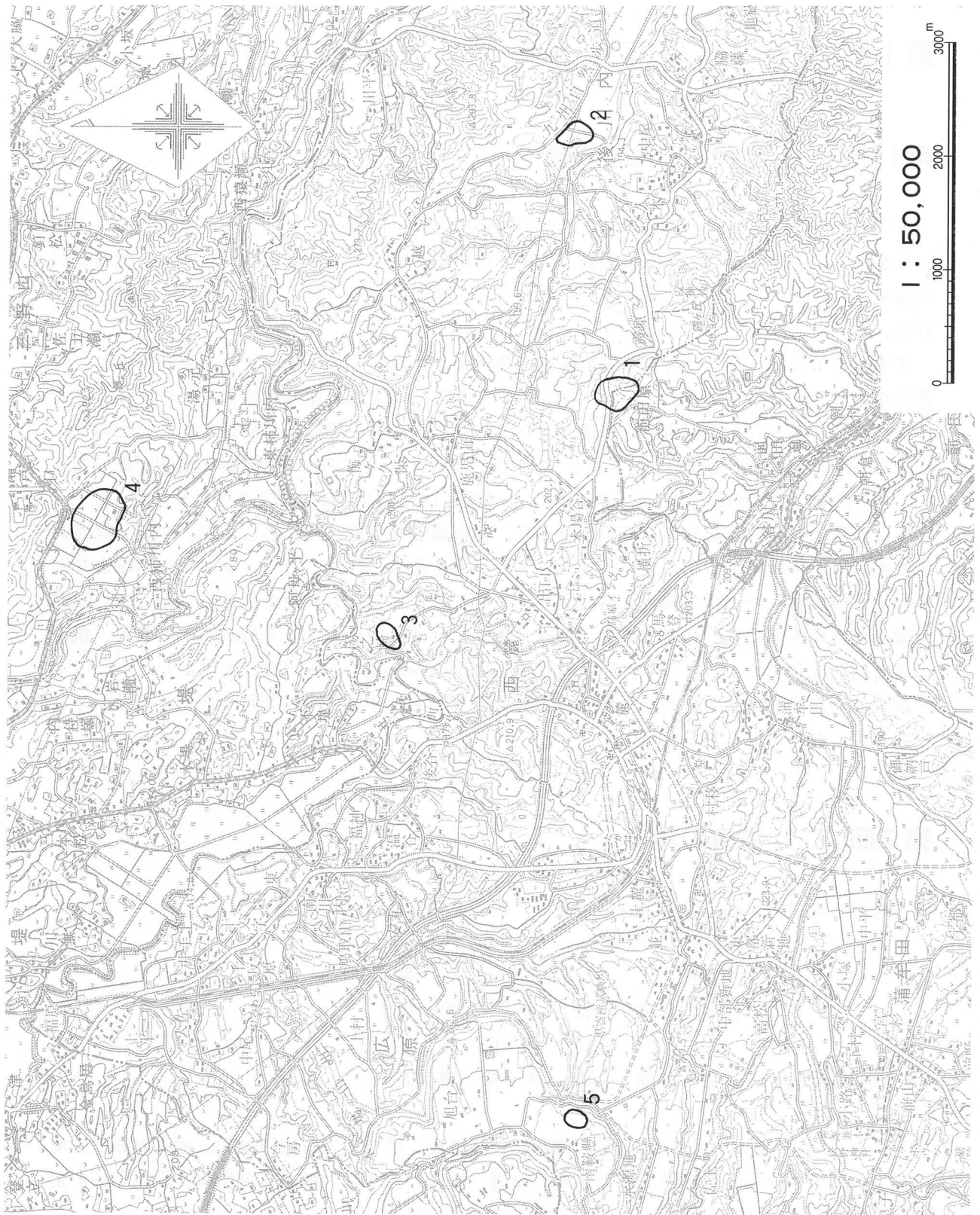
調査は、高原町教育委員会が主体となり、平成9年2月14日から3月7日までの延べ12日間実施した。

第2節 調査の組織

日守地下式横穴墓群の発掘調査の組織は、次の通りである（平成8年度）。

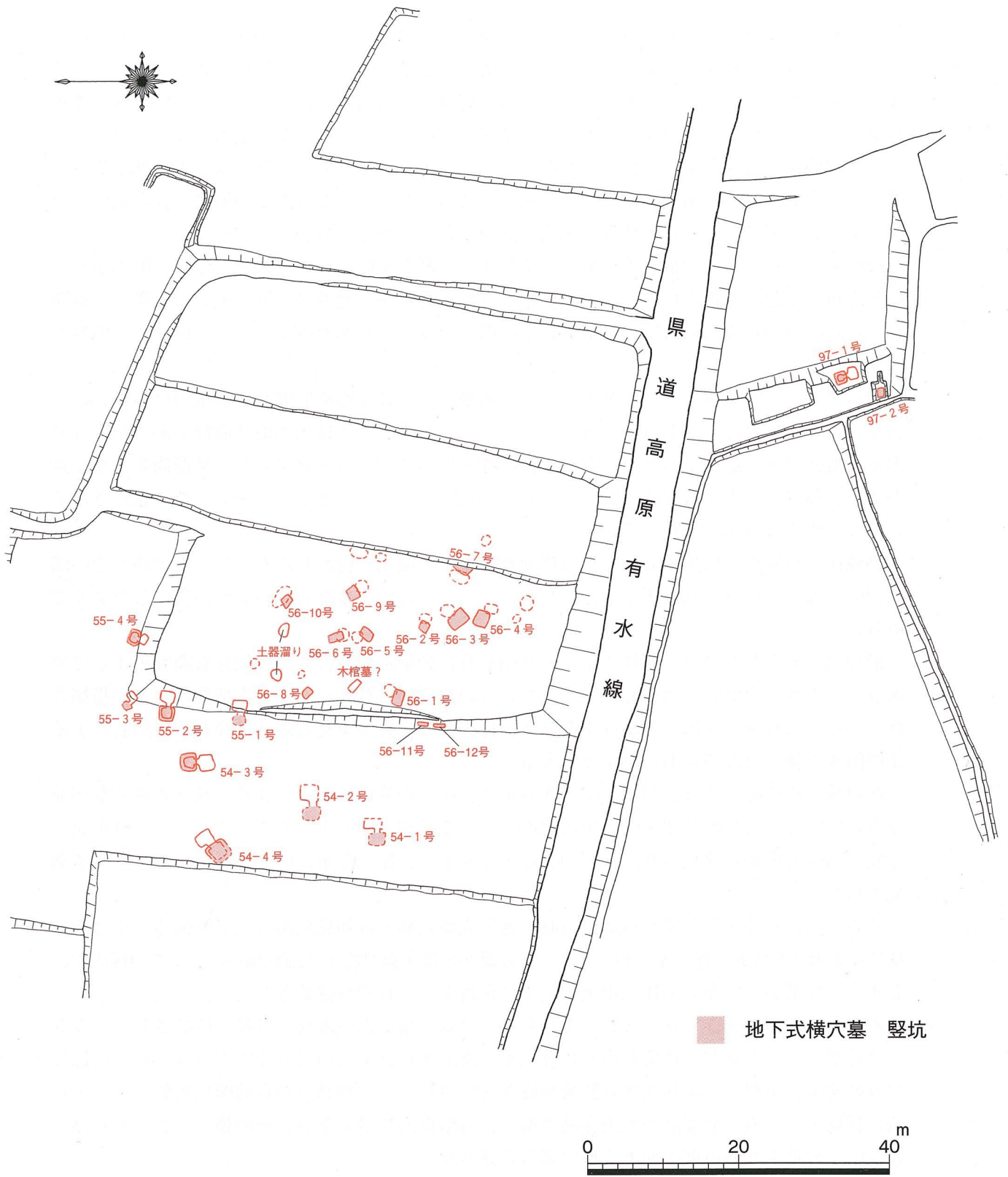
調査主体	高原町教育委員会		
	教育長	正入木	久男
	社会教育課	課長	益本忠男
		係長	森山博文
調査担当	社会教育課	主事	大學康宏

又、この調査において、宮崎県総合博物館近藤協氏、県文化課石川悦雄氏、面高哲郎氏、県埋蔵文化財センター谷口武範氏をはじめ、役場、地元の方々に、様々な御指導、御協力をいただいた。



- | | |
|---------------|--------------|
| 1. 日守地下式横穴墓群 | 2. 立切地下式横穴墓群 |
| 3. 湯ノ崎地下式横穴墓群 | 4. 大萩地下式横穴墓群 |
| 5. 旭台地下式横穴墓群 | |

第1図 遺跡位置図及び広域周辺地形図



第2図 日守地下式横穴墓群現状地形図

第3節 遺跡の歴史的環境及び調査状況

高原町をはじめ、西諸県地方では、地下式横穴墓が発見されることが非常に多い。高原町内だけでも、今回の日守古墳群を含めて計4箇所を確認されている。発見年代順でいえば、昭和47年12月に農作業中に1基発見された湯ノ崎地下式横穴墓、昭和51年12月に耕地整理作業中に13基発見された旭台地下式横穴墓群、昭和62年12月から昭和63年4月にかけて圃場整備中に次々と発見され、最終的に72基の地下式横穴墓と土壙2基、土器群2箇所が確認された立切地下式横穴墓群、などがある。このうち、まとまった量が検出された旭台・立切では、墓の配置による群の構造・構成を推察できる良好な資料となっている。

今回発見された地下式横穴墓のある宮崎県西諸県郡高原町大字後川内字日守は、町内から高崎町を抜けて北諸県郡高城町にいたる、県道高原・有水線の北側の丘陵を中心に位置し、道路を挟んだ南側の丘陵（北諸県郡高崎町大字前田字仮屋尾）とあわせて、日守・仮屋尾古墳群と認識されている。

明治年間に平部嶺南によって著された『日向地誌』「諸縣郡高原郷」の後川内村の項目に、日守野についての記述がある。それによると、少量の迫田・切換田の他は原野であったようである。地元の話によると、以前から古墳群中央の小さな谷を利用した、集落間をつなぐ道があり、周辺には人家もなく、かなり寂しい所だったようで、夜そこを通ると狐に化かされるといった類の言い伝えも残っている。

終戦後、高原町では比較的早くから耕地整理などの開発が行われたが、日守の道路もその開発の中に加えられ、早速拡張工事が行われた。その時に地下式横穴墓の玄室が開口したようである。

最初に発見されたのは、昭和44年の九州縦貫自動車道建設に伴う緊急分布調査のよってである。この時、道路の法面に6基開口しているのが認められ、早くから古墳群の存在が指摘されていた。ちなみに位置・詳細は不明だが、報告書の写真等を見る限り、軽石・自然石による羨門閉塞を施したものがあつたようである。

その後、高崎町側では、昭和44・45年に、採土作業に伴って、3基の地下式横穴墓が発見されている。これが日守・仮屋尾古墳群における最初の調査例である。それから10年後、今度は高原町側から発見された。昭和54・55年に、採土作業に伴って4基ずつ、計8基発見された。

そのうち、54-1号墓からは、当時、地下式横穴墓では初見であつた家屋構造で束柱の上部に斗を乗せた状態の浮き彫りが、54-3号墓からは床面を約10cm程掘ったシラスの屍床が、54-4号墓からは床面・体位中央・足下に朱痕が、それぞれ確認された。その翌年行われた調査では、55-1号墓からは朱を施した頭蓋骨と貝輪が確認された。55-2号墓では、天井部分に造り出した棟木や、羨道から玄室にいたるまでのカシワバンの部分のみの塗朱、南壁の彩色線文等の装飾が成されていた。又、被葬者の右前腕に着装された16個の貝輪をはじめ、鉄製品等の副葬品の量も、古墳群内で最も多い。その他、55-3号墓・55-4号墓などの小型の地下式横穴墓も発見された。

引き続き昭和56年、宮崎県教育委員会により、これまで発見された8基の地下式横穴墓の東側の、古墳群の中で最も高所にある畑地を確認調査したところ、計10基の地下式横穴墓の竪坑と推定される遺構の他、木棺墓(?)1基、土器溜り2箇所が検出された。又、西側法面に竪坑の断面が2箇所確認された。

それから後は、今回の調査までは、発掘調査は行われていない。

又、発掘調査ではないが、平成9年8月27日より9月7日にかけて、文部省科学技術研究費補助金重点領域研究の遺跡探査事業が、天理大学文学部考古学研究室の置田雅昭教授を中心としたグループにより行われた。昭和56年度調査区を中心にレーダー・電気探査を実施したところ、調査区外などから計5箇所 of 異常応答が見られた。その探査結果を受けて、平成10年12月16日より23日にかけて確認調査を行った。前回の異常応答箇所のうち、詳細不明の応答箇所に対する試掘調査及び玄室内部の温湿度の測定、さらには羨道を開口してカメラを挿入し、デジタルカメラによる内部撮影及び合成写真作成等を実施した。又、同調査区の東隣の畑地に対して探査を行ったところ、新たに1箇所の異常応答が見られた。

現在のところ、天理大学による探査で発見されたものを除いて、31基の地下式横穴墓が確認されているが、地元の人の話によると、調査の機会なく破壊された地下式横穴墓もあるという話なので、正確な数は不明である。

第Ⅱ章 調査の結果

第1節 調査の概要

日守地下式横穴墓群の発掘調査は、平成9年2月14日から3月7日まで実施した。発掘調査は、造成中に陥没した1基（以下、97-1号墓）を対象としていたが、調査の結果、その南西側にさらに別の地下式横穴墓の竪坑（以下、97-2号墓）が確認された。これについては、竪坑の埋土と羨門の閉塞状況のみ確認した。97-1号墓は、羨門板閉塞平入両袖寄棟造で、被葬者は確認されなかった。副葬品は、蛇行剣・剣・刀子各1点、鉄鏃6点、鉈2点、計11点確認された。97-2号墓では、軽石による羨門閉塞が確認された。

第2節 調査の結果

1. 97-1号墓（第3～4図）

遺 構（第3図）

この地下式横穴墓は、調教行く委員会に届け出の時点では、玄室の天井中央部が造成の際に崩落しており、それを塞ぐように板を並べ、遺構を保護するような形で上から土がかけられていた。

しかし、天井のアカホヤ部分が崩落したり、左壁の棚状施設もアカホヤ部分からが倒壊しているなど、損傷は激しかった。

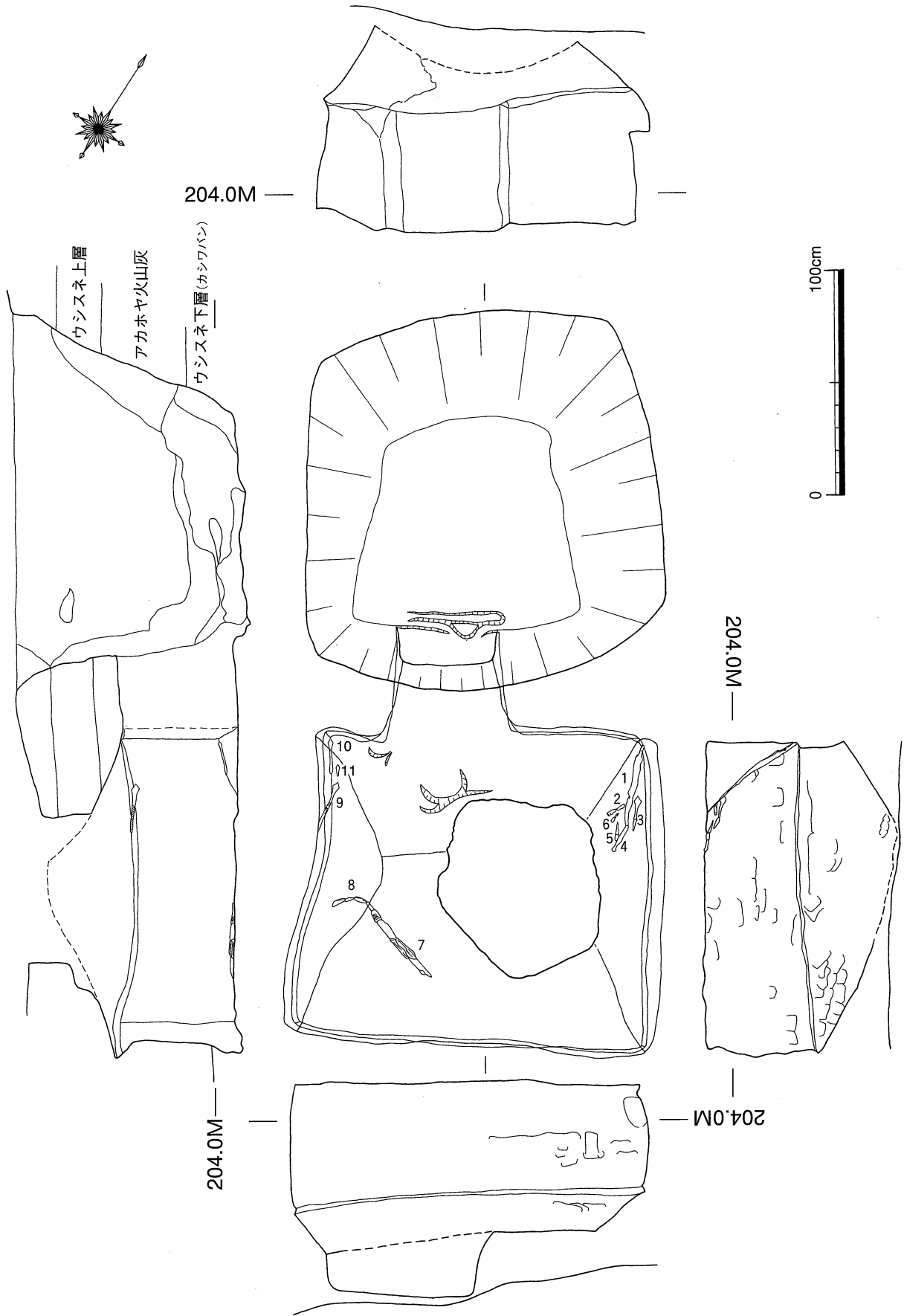
竪坑・玄室共に大部分をアカホヤ火山灰の中に造り込み、床面から高さ約10cmの辺りまでがカシワバンである。構造は、羨門板閉塞の平入両袖寄棟造りで、中心軸の方位は、N32°Wである。

竪坑は、上面が造成により削り取られたのみで、ほぼ原形を保っていた。残っている時点では深さ99～104cmで、足掛け状の施設は見当たらなかった。

長軸は、残っている上面部分で、131～168cm、短軸は129～159cm、形は玄室側が少し広くなった台形状である。又、底の方では、長軸が94cm、短軸が73～102cmで、羨門の対面側の傾斜を比較的緩くしている。

羨門は、竪坑埋土の状況から板で閉塞されたものと思われる。羨道には既に羨門付近と同質の土が流れ込んでいた。羨道の床面は竪坑より5cm程上がっており、竪坑と羨道の境には、羨道と同じ幅の、竪坑床面より深さ2cm、羨道より深さ7cmの練り込みがあり、ここに板を差し込んで閉塞したものと思われる。羨道は、高さが入口部分で52cm、玄室部分で52.5cm、幅は入口で46cm、玄室で56cm、長さは39cmである。なお、玄室側は、天井屋根部分の重みで、中心に亀裂が入り、崩れそうになっていた。

玄室は、天井の崩落・竪坑埋土・遺構埋土などで保存状態はかなり悪かった。平面プランは、主軸方位で136cm、幅が前壁で143cm、奥壁で156cmの台形状で、高さが床面から天井の棟木部分までが84cmである。



第3図 97-1号地下式横穴墓遺構実測図

床面は小さな凸凹が多く、丁度中心部分から奥が一段高くなっている。袖部も、一応は両袖だが、左袖部は小さく、又、床面は隅の方へ行くにつれて高くなっており、整形も不完全なままである。右袖と較べると、かなり雑な造りである。

四方に棚状施設を有するが、前・奥壁は幅2～3cmと狭く、又、斜めに面取りされているので、棚というよりは庇をイメージしたような形である。床面からの高さは奥壁で45～55cm、前壁で52.5～61cmである。左壁のものは奥壁側から前壁に向かって湾曲しており、床面と平行になっていない。高さは、奥壁の方で51cm、前壁の方で43cm、幅は6cmである。右壁が最も丁寧に造り込まれているが、奥壁側が緩やかに高くなっている。高さは41.5～51cmである。

屋根部分は寄棟造りだが、前壁のみ右上がりとなっている。右側棚状施設から20cmの高さの所までアーチを約90度組み、その先端と隅降棟がつながっているためである。

玄室築造の調整痕は、壁面全体に残っているが、特に天井部では深く残存している。下から上へ削るものが多く、調整工具は隅丸方頭で幅5～7.5cm、不明瞭なもので幅10cmのものがある。棚状施設は丁寧に工作しているのに較べ天井は彫り込みによる段差ができていほど調整が荒い。ただ、天井の稜線ははっきりと出している。

被葬者は不明、副葬品では、鉄製品が合計11点確認された。

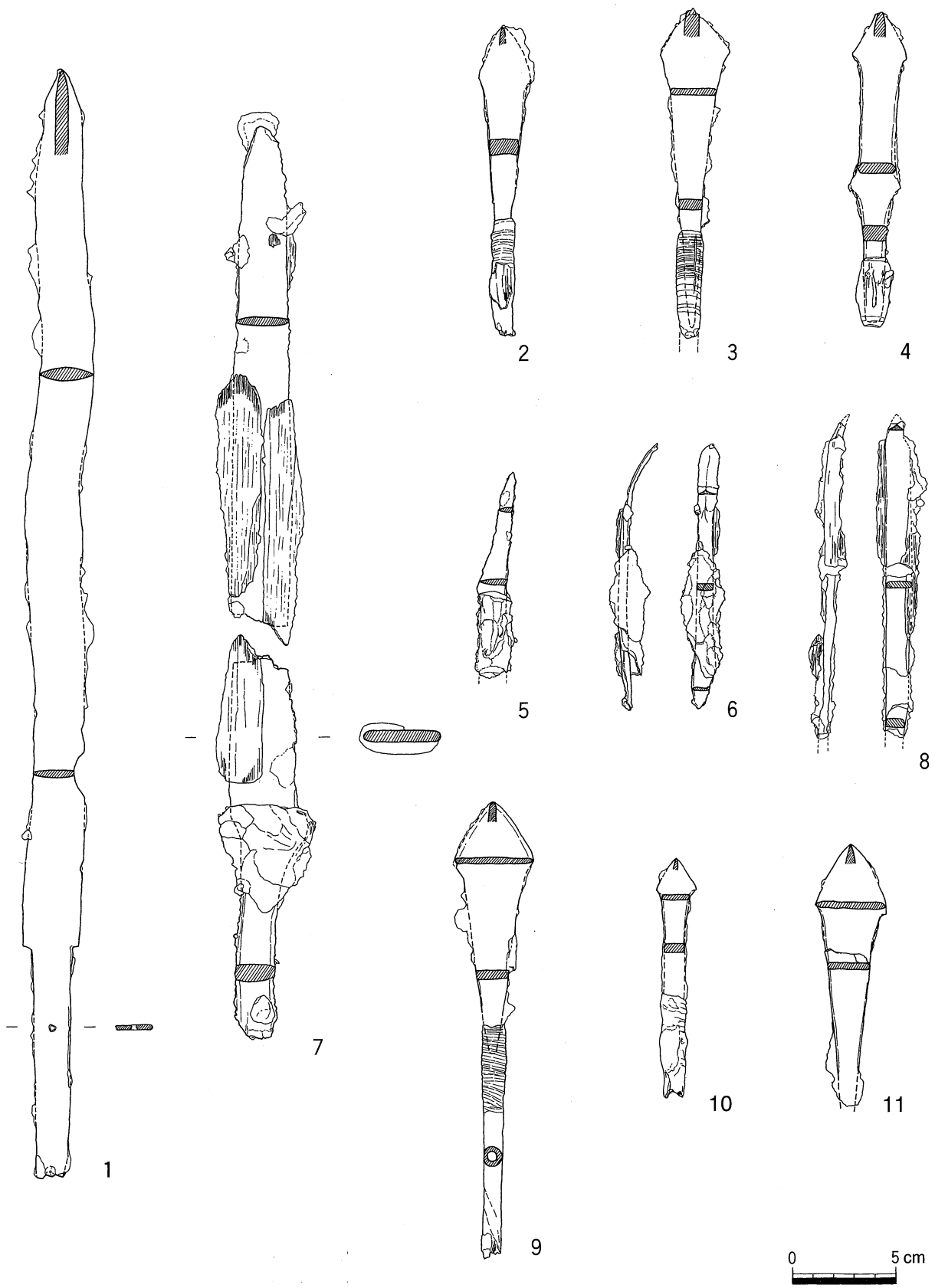
遺物（第4図）

玄室内の副葬品は、蛇行剣1点、剣1点、刀子1点、鉈2点、鉄鏃6点、計11点確認された。発見箇所は大きく3つのグループに分かれる。第1のグループは、前壁右隅に集中している。蛇行剣の切先を下に向けて隅に立て掛け、その下にそれぞれ先端を隅に向けた状態であった。内訳は、蛇行剣1点（1）、刀子1点（5）、鉈1点（6）、鉄鏃3点（2・3・4）である。第2のグループは、中心よりやや奥側の床面である。天井及び左壁棚状施設の崩落による破損が著しかった。内訳は剣1点（7）、鉈1点（8）である。第3のグループは、左壁棚状施設上及びその下側である。遺物の出土状況から見て、棚状施設に置かれていたものが棚状施設の崩落によって落下したものと思われる。内訳は鉄鏃3点（9・10・11）である。

蛇行剣（1）は、玄室北東部隅に切先を下にして立て掛けられていた。発見当初、刃部中程から切先にかけて、天井のアカホヤ火山灰が積もっていたため、錆化が著しい。

全長（残存長）は54.2cm、刃部は2度屈曲しており、長さは42.9cmである。かなり細身で、剣というよりは槍をイメージするような細さである。切先にはフクラが見られず、稜線が左右非対称の二等辺三角形状になっている。断面形状は薄いレンズ状で、鎬は見られない。刃幅と刃厚は、それぞれ刃元で2.85cmと0.35cm、刃部中程で2.6cmと0.65cm、刃先で1.95cmと0.6cmである。片側に関から7.5cmの所に幅2.1cmの繰り込みが見られる。関は両関で、直角に切り込んでいる。幅は左右共に0.4cmである。茎部は、端部が少し欠落したような形の穴が穿っている。残存長11.3cm、幅1.7cm、厚0.23cmである。目釘穴は関部から4.0cmの所に1つあり、口径は0.35cmである。もう1つ端部に目釘穴らしきものが見られ、実際は茎部はもう少し長かったものと思われる。刃部及び茎部に一部木質の痕跡が見られる。重量は232gである。

鉄鏃（2）は、玄室北東隅の蛇行剣の下に、鋒を北東隅に向けた状態で発見された。蛇行剣と同じく、天井のアカホヤ火山灰が積もった状態だったので、錆化が著しいものの、鏃身は完



第4图 97-1号地下式横穴墓出土遗物实测图

全に残り、矢柄の一部分も残存している。圭頭斧箭鏃で、断面は両平造りである。鉄鏃身は銹化が著しく、残存厚で0.7cmだが、実際はもう少し薄いと推測される。

矢柄は、表皮・内部組織ともに明瞭に残っている。ただ、乾燥のためか、数箇所、縦にひび割れている。茎部には3～4条程の少し盛り上がった樹皮巻状の痕跡があり、幅は大きなものでは5.5～6cm、その間にまた無数の細かい痕跡が確認できる。鏃身の残存長は、外に出ている部分で9.5cm、茎部を含めると14cm前後になると思われる。矢柄の口径は、外径0.9cm、内径0.6cmである。重量は、銹のため重くなっており、32gである。

鉄鏃(3)は、玄室北東隅で、鋒を北東隅に向け、右壁棚状施設に沿った状態で発見された。同じく天井のアカホヤ火山灰が積もった状態だったので、銹化が著しいものの、鏃身と矢柄の一部が残存している。圭頭斧箭鏃で、断面は両平造りである。刃部は、比較的銹が薄く、身厚は0.3cmだが、鋒・胴部は銹が分厚く、身厚は0.5～0.7cmである。茎部は、矢柄の中に完全に残っており、鏃身部分で10.7cm、茎部を合わせると、推定で15.3cmである。矢柄は樹皮巻の痕跡が明瞭で、先の部分は幅0.1cmの細かい筋が、中程から幅0.2～0.25cmのやや太い筋が見られる。矢柄の口径は、外径が0.9cm、内径は0.4～0.5cmである。重量は45gである。

鉄鏃(4)は、玄室北東隅で、鋒を玄室中央に向けた状態で発見された。同じく天井のアカホヤ火山灰が積もった状態で発見されたが、一部を除き、保存状態は比較的良く、鏃身と矢柄の一部が残存している。圭頭斧箭鏃で、断面は両平造りであるが、の突起より6.4cm下方にもう一組同じような突起が見られる。逆刺が折れてなくなったような形跡はない。身幅は、上の突起が2.6cm、下は2.4cmである。刃部は比較的銹が薄く、身厚は0.5cmである。矢柄は、乾燥のためか縦にかなりひび割れた状態であった。途中、中程で異様に膨らみ、最大径は1.55cm、破損端部は、外径0.9cm、内径0.55cmである。重量は45gである。

刀子(5)は、玄室北東隅の蛇行剣の下で、鋒を隅に向けた状態で発見された。同じく天井のアカホヤ火山灰が積もった状態で発見されたが、保存状態は比較的良く、刃部及び柄の一部が残存している。残存長は10.1cmで、そのうち、刃部は長さ5.8cm、刃幅及び刃厚はそれぞれ刃元で1.4cmと0.3cm、刃先は少し銹が厚くなって0.7cmと0.32cmである。関は片関で、関から柄部になっている。茎部の状態は不明である。柄部の長さは4.3cm、ほぼ円形で外径は1.4cmである。材質は鹿角製と思われる。重量は11gである。

鉈(6)は、玄室北東隅の蛇行剣の下で、鋒を北東隅に向けた状態で発見された。同じく天井のアカホヤ火山灰が積もった状態で発見されたが、保存状態は比較的良く、身部及び柄の一部が残存していた。全長13.0cmで、そのうち、刃部は長さ2.8cm、刃幅0.95cm、刃厚0.2cm、反りの内側に三叉鑿がうっすらと確認できるが、右側がはっきりとしているのに対し、左側は曖昧である。裏側は、わずかではあるが匙状になっている。茎部は長さ10.2cm、中央部分は端部と違って断面が長方形を呈しており、幅0.7cm、厚0.3cmである。茎端部は刃部の反りのない状態と同じ形に作られており、最大幅1.1cm、厚0.15cmである。鋒より3.2cmの所から7.8cmまでの間で断続的に木質の付着しているのが認められる。又、鋒より5.2cmの所から11.5cmの所まで鹿角製と思われる柄が装着されている。最初に木質を装着した後に鹿角製柄を装着したような形である。併し、木質を確認できるのは鹿角製柄の欠損したような所なので、断定はできない。末端は欠損し、胴部の崩壊も著しい。柄部の最大径は2.1cmである。重量は14gである。

剣(7)は、玄室床面で発見された。天井等の崩落により、2つに折れた状態で発見された。整理作業の過程で接合を試みたが、一部欠損しているようで、接合できなかった。全体的に銹

化が著しいものの、破損部分を除いては、刀身・茎部及び木製鞘の一部が残っている。ただ、銹のためやや分厚くなっており、特に関部分は錆汁により原形が確認できない。全長は、推定で43.1cm、刃部は推定で31.6cm、中程から刃元にかけて鞘の一部が残っている。鞘は木製で完全に刀身を覆っておらず、丁度刀身の中心線の辺りで丸く分かれている。刀身は両刃造で、切先にはフクラが見られず、断面形状は薄いレンズ状で、鑄は見られない。刀身を見る限り、(1)の蛇行剣と同じような造りである。刃幅及び刃厚は、それぞれ刃先で2.6cmと0.4cm、刃元で3.9cmと0.6cmである。関部についてはX線を使用しても形状の把握は困難であった。鹿角製と思われる刀装具が錆汁により異様に変形しているためである。柄部は刀装具上端より長さ11.5cm、銹化が著しい。幅及び厚は1.7cmと0.9cmである。重量は、刃部断片の方が149g、茎部断片の方が124gである。

銚(8)は、玄室奥の床面で発見された。左壁棚状施設の落下により、3つに折れた状態であった。鋒端部及び柄の一部が欠損している。木製鞘に納められていたものと思われ、全体的に鞘と同化しており、詳細が殆ど不明である。残存長は15.3cm、刃部は非常に短い。刃厚は0.3cmで、断面が三角形をなしている。茎部は幅1.2cm、身厚は0.3cmである。茎端部に行くにしたがって分厚くなっており、破損部近くでの身厚は0.4cmである。重量は30gである。

鉄鏃(9)は、玄室左壁の棚状施設に引っかかった状態で発見された。発見当初に取り上げられ、又元の場所に戻したという経緯から、当初は棚状施設に置かれていたものと推測される。圭頭斧箭鏃で、断面は両平造りである。銹化が著しいものの厚さにさほどの変化は見られず、身厚は頭部で0.32cm、鏃身で0.45cmである。茎は短く、2cm程度と推測される。矢柄は11.2cm残り、樹皮巻も明瞭に残っている。茎部分は横巻きで、幅は0.1~0.15cmである。それが4.5cm程続き、最後に端部を折り込んだような形跡がある。又、その下にはうっすらと左上がりに巻いた形跡がある。茎の口径は外径0.9cm、内径0.7cmである。重量は48gである。

鉄鏃(10)は、玄室左壁の下で発見された。壁と平行の状態で見られたことから、当初は左壁棚状施設に置かれていたものと思われる。圭頭斧箭鏃で、断面は両平造りだが、他のものに較べてかなり細身で、頭部も小振りである。鏃身の幅と身厚は、1.05cmと0.35cm、頭部の幅と身厚は1.9cmと0.2cmである。断面は、頭部に行くに従って薄くなっている。矢柄は鏃茎部を含め一部残存している。口径は0.9cm、うっすらと茎部に樹皮巻の痕跡がある。重量は11gである。

鉄鏃(11)は、玄室左側床面で、2つに折れた状態で発見された。玄室左壁棚状施設から落下したものと思われる。茎部が途中から亡くなっているが、全体的に残りは良い。圭頭斧箭鏃で、断面は両平造りである。残存長は、12.9cm、身厚は0.35cm、重量は18gである。

2. 97-2号墓(第5図)

遺 構(第5図)

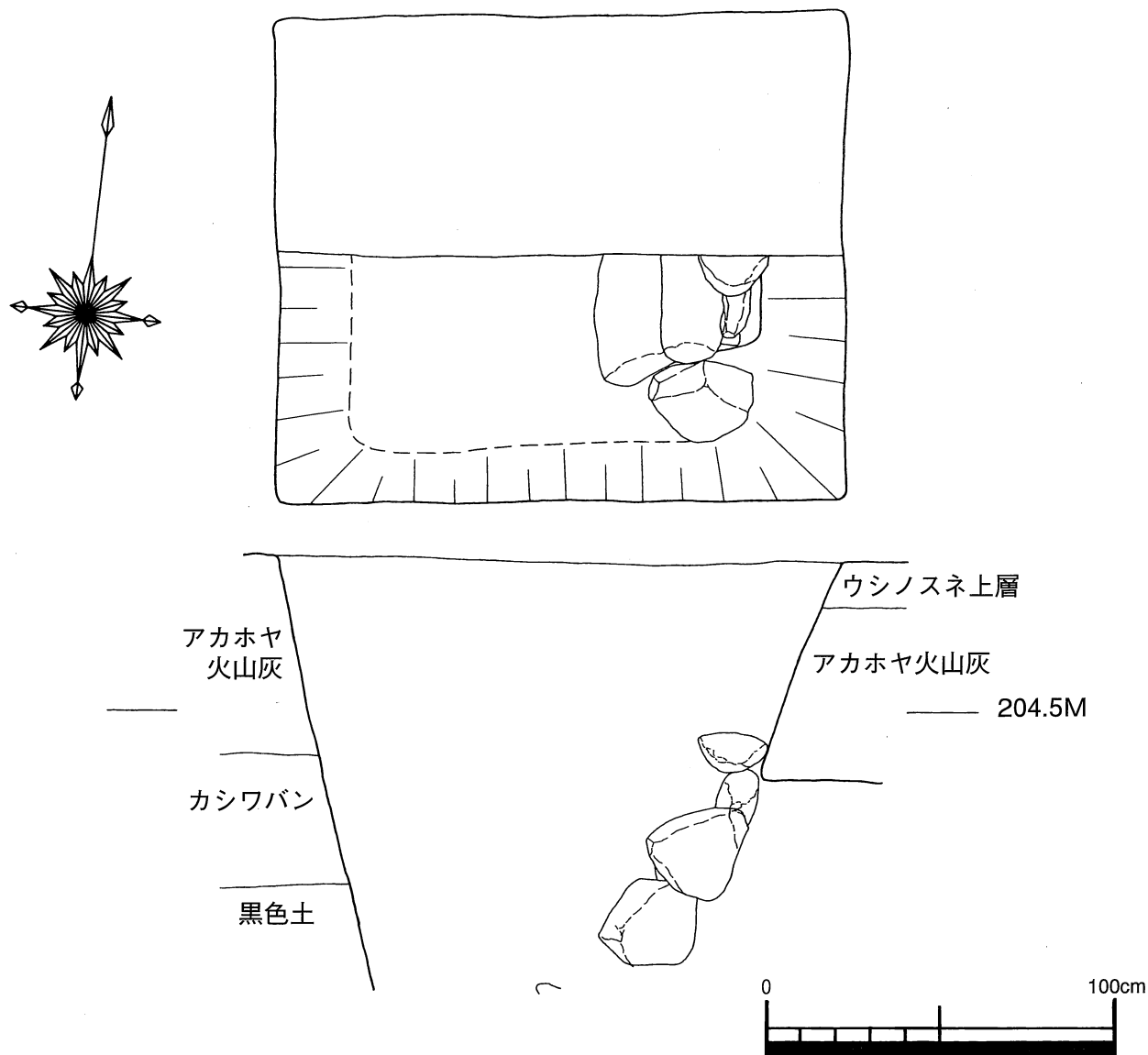
この地下式横穴墓は、97-1号墓の竪坑を確認するために、玄室南西側にトレンチを設定したところ、別の竪坑を発見した。これについては、造成地の南端にあり、造成すれば隣の法面が崩れる可能性があったため、現状のまま留め置くとして、竪坑とその埋土、閉塞状況のみ

この地下式横穴墓は、97-1号墓の竪坑を確認するために、玄室南西側にトレンチを設定したところ、別の竪坑を発見した。これについては、造成地の南端にあり、造成すれば隣の法面が崩れる可能性があったため、現状のまま留め置くとして、竪坑とその埋土、閉塞状況のみ確認した。

竪坑は、97-1号墓と同じく上面が攪乱されており、同じ土層で検出された。主軸方位はW7°S、長軸が160cm、短軸が180cmの方形である。竪坑埋土はほぼ一層に限られるが、掘削中、床面近くでかなり堅くしまっており、又、閉塞に使用されているものと同じ種類の軽石が埋土下面に露出していたことから、追葬の可能性はある。

羨門は軽石によって閉塞されていた。粘土等の目張りはなされておらず、ただ積んだだけというような状態であった。羨道との隙間も多い。

玄室については調査は行わず、埋め戻して現地保存とした。



第5図 97-2号地下式横穴墓遺構実測図

第III章 まとめ

第1節 遺構

今回発見された地下式横穴墓は、従来知られていた場所より、幾分はずれたところで発見された。玄室そのものの大きさについては、床面積など特に際立ったところはないが、天井がやや低めに作られている。ただ、今回のものは両袖で、片袖型式の多い日守古墳群内の中で、両袖の玄室を所有するのは、仮屋尾2号墓（昭和44年調査）と97-1号墓のみである。しかし、左袖は床面を平にしない中途半端な工作や凹凸の多い粗い床面など、全体的に雑な印象を受ける半面、右袖には丁寧にアーチ状彫刻を施すなど、左右で全く異なる印象を受ける玄室である。羨門閉塞法に関しては、97-1号墓は、埋土の状況から板閉塞と推定されたのに対し、97-2号墓は軽石閉塞であった。ただ、これも隙間の多い、非常に雑な積み方という印象を受けた。

第2節 遺物

副葬品について、剣・鉄鏃・刀子等の基本構成パターンは、他の地下式横穴墓と変わらないが、基本構成パターンの中に入っている刀や、旭台・立切等の、他の地下式横穴墓群に見られる二段逆刺鉄鏃や大型圭頭鏃が無いのに対して、蛇行剣や（4）・（10）のようなこれまで出土することのなかった鉄鏃などの遺物が見られ、群内の地下式横穴墓とは一線を画するような感じである。特に蛇行剣については、これまで100基以上もの地下式横穴墓が確認されている高原町でも初見であった。

蛇行剣については、甲冑や二段逆刺鉄鏃等と共に畿内と隼人との関係を示唆する遺物と考えられており、これまでに南九州で35振出土しているが、その殆どが地下式横穴墓から出土している。高原町の近辺では、えびの市島内地下式横穴墓群、野尻町大萩地下式横穴墓群で確認されている。ただ、今回ののはかなり細身で、鏃も見られず、どちらかといえば槍のようなイメージを受ける。

（4）の異形鉄鏃については、同じ日守地下式横穴墓群の55-2号墓、都城市菓子野59-1号墓（1号鉄鏃）の2箇所と同型の鉄鏃が確認されている。特に、日守55-2号墓については、同じ群の中でもかなりの副葬品を有しているだけでなく、天井部の彩色線文、壁面への塗朱など玄室の装飾も際立っている上、熟年女性と推定される人骨の右前腕骨に装着された貝輪などの装飾品から見て、古墳群被葬者の中心に近い地位にいたものと思われる。ただ、上記の鉄鏃に関しては、頭部が圭頭というよりはフクラのついた柳葉に近い形態で、どちらかといえば菓子野59-1号墓のものに近い。いずれにせよ、このような形態を持った鉄鏃の出土例が少ないのも奇妙である。

第3節 結語

以上、この地下式横穴墓の年代を推定すると、まず、日守地下式横穴墓群の使用期間については、大体5世紀後半から6世紀初めという年代が与えられている。97-1号墓については、蛇行剣が出土していることや、大型の圭頭斧箭鏃・長頸鏃が見られないことから考えて、おお

よその目安としては、5世紀後半に築造されたものとして良いのではないか。しかし、異形鉄鏃や、地下式横穴墓自体の造りから考えるならば、5世紀中葉にまで遡るのもので、日守地下式横穴墓群の中でも、比較的初期の段階で築かれたものではないだろうか。

(参考文献一覧)

- | | | |
|----------|------|--|
| 平部嶺南 | 1884 | 『日向地誌』 |
| 宮崎県教育委員会 | 1966 | 『九州縦貫自動車道遺跡分布調査報告書』 |
| 宮崎県教育委員会 | 1970 | 「高崎町仮屋尾地下式古墳調査報告」『宮崎県文化財調査報告書』 第15集 |
| 宮崎県教育委員会 | 1972 | 「高原町湯ノ崎地下式古墳調査報告書」『宮崎県文化財調査報告書』 第17集 |
| 宮崎県教育委員会 | 1977 | 「旭台地下式古墳群発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』 第19集 |
| 宮崎県教育委員会 | 1980 | 「日守地下式横穴54-1～4号発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』 第22集 |
| 宮崎県教育委員会 | 1981 | 「日守地下式横穴55-1～4号発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』 第23集 |
| 宮崎県教育委員会 | 1981 | 「日守地下式古墳群確認調査」『宮崎県文化財調査報告書』 第24集 |
| 都城市教育委員会 | 1986 | 「菓子野地下式横穴」『都城市文化財調査報告書』 第4集 |
| 高原町教育委員会 | 1991 | 「立切地下式横穴墓群」『高原町文化財調査報告書』 第1集 |
| 宮崎県 | 1993 | 『宮崎県史 資料編 考古2』 |
| 東憲章 | 1996 | 「地下式横穴墓の基礎的研究」『考古学雑渉・西野元先生退官記念論文集』 |
| 宮崎県 | 1997 | 『宮崎県史 通史編 原始古代1』 |

尚、蛇行剣の資料等については宮崎県埋蔵文化財センターの東憲章氏から、鉄鏃の年代観については、同センターの和田理啓氏、異形鉄鏃については、同センターの高橋誠氏、都城市の異形鉄鏃については、都城市教育委員会文化課の矢部喜多夫氏にご教示をいただいた。この場を借りて感謝いたします。

又、置田雅昭氏に玉稿をいただいたが、印刷の都合上、校正を受けることができなかった。一部、氏の意図するところと異なる箇所があると思うが、その点をご容赦願いたい。

第1表 川除遺跡出土鉄器計測表

(単位 cm)

遺物番号	名称	全長 (残存長)	刃部長	茎部長	刃部幅	刃部厚	重量	備考
1	蛇行剣	54.2	42.9	11.3	1.95 ~2.85	0.35 ~0.65	232 g	刃部に繰り込み
5	刀子	10.1	5.8	4.3	0.3 ~1.4	0.3 ~0.32	11 g	柄鹿角製?
7	剣	43.1	31.6	11.5	2.6 ~3.9	0.4 ~0.6	273 g	刀装具鹿角製?

(単位 cm)

遺物番号	名称	全長 (残存長)	鎌身部長	鎌身部幅	鎌身部厚	矢柄部長	重量	備考
2	圭頭斧箭鉄鎌	15.1	9.5 ~14.0	0.9 ~2.6	0.7	5.7	32 g	
3	圭頭斧箭鉄鎌	16.2	10.7 ~15.3	0.95 ~3.4	0.3 ~0.7	5.3	45 g	
4	圭頭斧箭鉄鎌	15.4	12.1 ~15.2	1.75 ~2.7	0.5 ~0.75	3.4	45 g	
9	圭頭斧箭鉄鎌	22.5	11.0 ~12.4	0.9 ~3.9	0.32 ~0.45	11.2	48 g	
10	圭頭斧箭鉄鎌	11.8	6.8	1.05 ~1.9	0.2 ~0.35	5.0	11 g	
11	圭頭斧箭鉄鎌	12.9	—	0.7 ~3.55	0.35	—	18 g	

(単位 cm)

遺物番号	名称	全長 (残存長)	刃部長	茎部長	鈍身部幅	鈍身部厚	重量	備考
6	鈍	13.0	2.8	10.2	0.7 ~0.95	0.2 ~0.3	14 g	柄部鹿角製?
8	鈍	15.3	0.8	14.5	0.85 ~1.2	0.3 ~0.4	30 g	

宮崎県高原町日守地下（立坑）式横穴墓群のレーダ探査・補遺

この報告は、平成10年9月に行われた第1回日本文化財探査学会において発表された内容及びその補足である。

文中で使用される用語等は、地名の訂正を除いては、原文のまま使用している。

宮崎県高原町日守地下（立坑）式横穴墓群のレーダ探査・補遺

○置田雅昭・桑原久男 天理大学文学部
Walter Edwards 天理大学国際文化学部
西村 康 奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター
Dean Goodman マイアミ大学地球物理学応用考古学探査研究所中島町研究室

日守地下式横穴墓群は宮崎県西諸県郡高原町大字後川内にあつて、隣接する高崎町にまたがつて位置している。遺跡は標高200m前後の、緩やかに北に傾斜する、台地上に営まれている。1967年の分布調査で、道路の切り通しで3基の地下式横穴墓が確認された。1979・80年には畑の地下げ工事で、8基の地下式横穴墓が発見され、発掘調査されている。その平均的な大きさは、立坑の平面が1.7×1.4mの長方形で、地表下1.7mまで掘り、横穴を掘って墓室とする。立坑から墓室に至る羨道は幅、高さとも0.5m前後あつて、墓室の平面の大きさは1.7×1.2m、高さ1m前後である。天井は寄せ棟の形状をなし、壁との境に棚を作る。墓室には数体の遺骸を埋葬し、羨道入口を複数の石材で閉鎖する。立坑はある程度の深さまで土で埋め戻したものらしい。現状では地上に何の標識も残さないため、遺構を確認することが不可能である。地下式横穴墓と地層との関係は墓室天井がアカホヤ火山灰層の中にある。これは築造者がアカホヤ火山灰が固く、墓室の空洞を保つのに適していたことを熟知していた結果と思われる。

探査は1981年に宮崎県教育委員会が約300m²を発掘し、10基の地下式横穴墓を確認した地域（第1調査区）と東に20m離れた畑（第2調査区）で行つた。探査目的はすでに明らかにされている立坑の墓室を明らかにすること、および、発掘調査の範囲外にも地下式横穴墓がないか、また、その分布範囲がどこまでおよぶかを確かめることであつた。

調査は1997年夏期に実施した。まず地形測量を行い、レーダ・電気探査と地中温度の測定を行つたが、ここでは主として、レーダ探査の結果を報告する。レーダ探査はジオレーダ1機（図1）とサー2機の2種の機械を用い、300と700メガヘルツの2種のアンテナで、同じ地域を都合3回探査した。第1調査区の探査範囲は南北の最大長が57m、東西の最大幅が21mで、面積にして約700m²である。ジオレーダ1機は1mで、サー2機では0.5m間隔で探査し、平面図化した。この方法は遺構の位置とは無関係に、あらかじめ設定した測線に沿つて探査したものであるが、これによつて遺構の位置を推定して後に、立坑と墓室に直交するように測線を設け、0.5m、あるいは0.25m間隔で探査し、細部を明らかにするようにした。第2調査区ではサー2機、700メガヘルツのアンテナを用い、1m間隔で、1,350m²を探査した。

結果的に第1調査区では、13箇所空の墓室あるいは天井の落下した墓室と推定される異常応答をとらえることができた。なお、そのうち9箇所は発掘で確認されている立坑と対応するが、8号立坑の周辺には明確な異常応答も見いだすことができなかった。すなわち、残る4箇所（これをX1・X2・X3・X4と呼ぶ）が新たに地下式横穴と推定されるものである。また、2号立坑は1mあるいは0.5m間隔で規則的に探査を行つても墓室の位置が不分明であつたが、立坑と直交するように測線を設定し、0.25m間隔で探査したところ、立坑と推定される異常応答がみられ、その南東の狭い範囲に異常応答がみられた。そのほか、例えば、3号立坑に対応する空洞と推定される応答の南西（立坑寄り）に強い異常応答（図2）があり、反対の北東側にはこうした応答がみられなかった。また、7号立坑と墓室を縦断する探査では深さの異なる2つのこぶ状の特徴的な波形（図3）がみられた。6号立坑に対応する異常応答は、その一部が空洞を示す波形とは異なる。

第1地調査区全般の所見としては、墓室と推定されるものは明瞭に現れ、その波形によつて、空洞、天井の落下した空洞を判断できた。立坑については、それと判断できる応答のある場合と、立坑のあるべき位置になんら異常波形をみることのできない場合があつた。

第2調査区の探査は、サー2機での、1回限りの探査であり、十分なものではないが、地下式横穴の墓室を推測させるような明確な異常応答は1箇所にすぎない。

こうした探査の結果に対して、考古学的には次のように判断される。8号立坑に対応する墓室の応答が認められないのは、これが地下式横穴の立坑ではないのではないかと推定される。発掘された立坑の平面形がいびつであり、他の立坑の形と異なるのも推定の根拠である。なお、より細かくみると、8号立坑の北東0.5mに小さな異常応答が認められる。これが墓室の応答の可能性があるが、南西6mにも同様の小さな異常応答があり、南西のそれは立坑とは関係のない場所であるので、

北東のそれも墓室とは判断しなかった。2号立坑は波形の違いにより識別することができたが、1981年の発掘調査時の写真では羨道の上部まで発掘している。従って、ここで立坑が明瞭に識別できたのは、この発掘結果をとらえたものであろう。3号立坑と推定空洞の間にみられる強い応答は羨道の石蓋をとらえているのではないかと推定される。7号立坑に対応する2つのこぶ状の応答は、深い方が羨道の応答、浅い方が墓室の応答であり、羨道には石蓋があるのとの推測が可能である。6号立坑に対する応答は落下した墓室を推測させるものであるが、発掘時の記録にはそうした記述がない。仮にこの推測に誤りがないとすれば、1981年以降に何らかの理由で天井の一部が落下したとせざるを得ない。

第2調査区の探査範囲外の北東数mで、地下式横穴墓が検出されたとの報告もあるが、遺構の分布が極めて希薄であるとせざるを得ない。この点、第1調査区との間の探査の空白地帯を調査することにより、遺跡全体の様子を明確にすることができよう。

以上の、探査と考古学的推定から、さらに、地下式横穴墓の分布について、ある推測を加えることが可能になった。すなわち、立坑と墓室の方向が一見無秩序に分布するように見えるが、1・5・6号立坑、9号立坑とX1・X2、2・3・7号立坑、4号立坑とX3の4群はほぼ円周に沿って立坑が位置し、中心の方向に墓室が認められることになる。最大12m、最小6mの墳丘を復元することができよう(図4)。発掘をしないで、構築されていたであろう墳丘の復元を可能にしたのは、初めてのことである。

また、3機種レーダを用いた実験では、ジオレーダ1機では大まかな分布しかとらえることができないが、300メガヘルツのスライス平面図(図5右)では、墓室を円形あるいは楕円形に表示することができた。さらに、700メガヘルツのスライス平面図(図5左)は墓室を方形にとらえる事が明らかになった。当然の事ながら、目的に応じて探査機種を選定する必要がある。引き続き日守地下式横穴墓群を探査するとともに、その一部を発掘して、石蓋とした推定が正しいものであるかどうかを検証する予定である。

補遺

以上は1998年9月に行われた第1回日本文化財探査学会発表要旨に、発表に用いた図を加えたものである。本文の一部の用語を変更したが、論旨は変えていない。

文中で「7号立坑に対応する2つのこぶ状の応答は、深い方は羨道の応答、浅い方が墓室の応答であり、羨道には石蓋があるとの推測が可能である。」とした全文を削除する。これは南北方向の探査ラインの情報から解釈したものであるが、立坑と墓室は東西方向に主軸を置くから、南北方向からは立坑と墓室の関係をとらえることはできない。単純な錯誤から生じた誤りである。なお、この指摘は共同研究者のW.Edwardsによるものである。

Edwardsは7号墓の2つのこぶ状の応答を、ともに墓室と解釈し、深い方の応答が墓室の本来の天井をとらえたもので、浅い方の応答は落下した天井を捉えたものではないかと解釈した。置田も妥当な解釈と判断し、これに従う。

なお、1998年12月に本遺跡の第2次調査を実施した。調査内容はレーダ探査、電気探査、地中温度測定、3号立坑・8号墓立坑の発掘、7号墓室のボーリング調査である。この結果8号立坑は第1次調査の推定とおりの墓室は認められなかつた、地下式横穴墓でないことが判明した。3号立坑は推定とおりの位置に墓室を確認したが、石蓋は認められなかつた。また、7号墓室のボーリング調査ではアカホヤ火山灰層にあたらぬまま、空洞に達したから、天井の一部の落下していることが確実視され、Edwardsの解釈が裏付けられた。なお、第1調査区と第2調査区の間を第3調査区とし、探査を行ったが、ここでは新たに地下式横穴墓と推定される1つの異常応答が認められた。

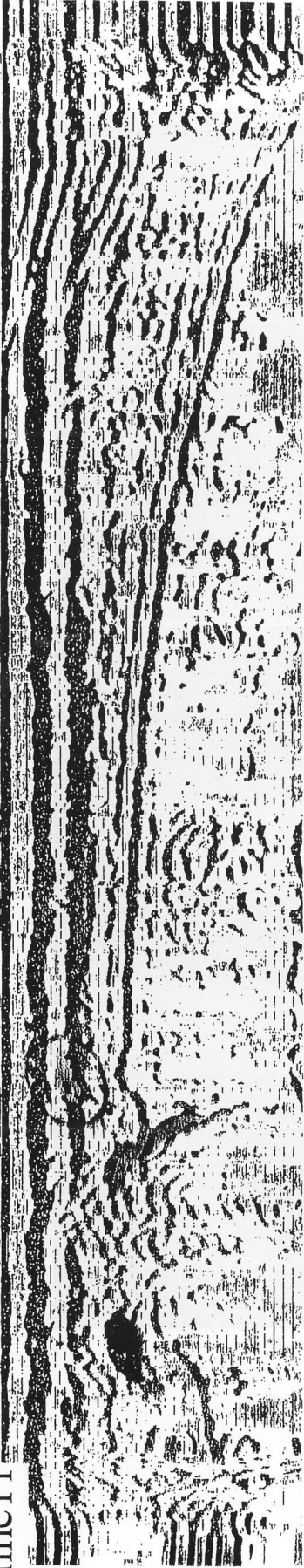
第2次調査の検討は別途行うが、発表要旨の再録にあたり、補遺として最新の調査結果を加えておく。(1998年12月27日 置田)

図解説

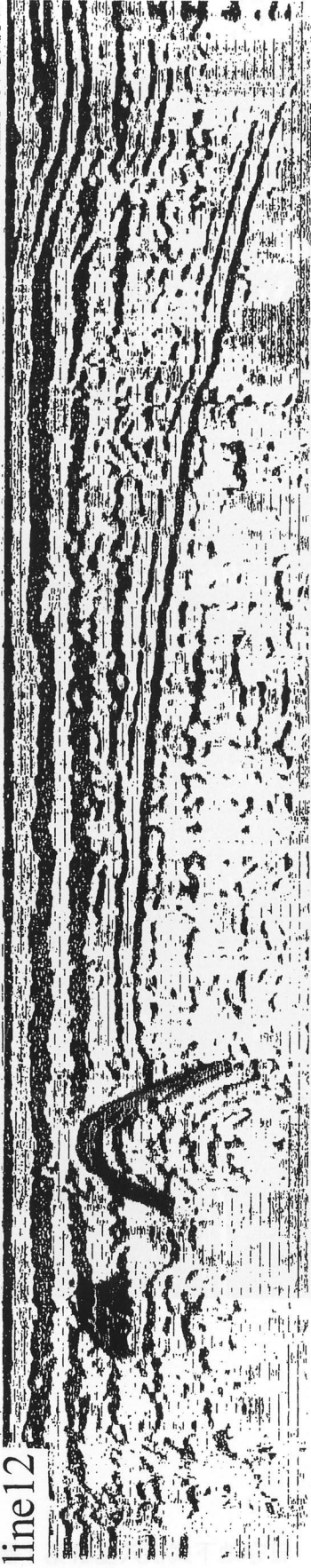
- | | | | |
|----|----------------|-----------------------|-----------|
| 図1 | 日守地下式横穴墓群第1調査区 | ジオレーダ1機による断面図 | 右が北 |
| 図2 | 日守地下式横穴墓群第1調査区 | 4号立坑と3号墓室の応答 | サー2機 |
| 図3 | 日守地下式横穴墓群第1調査区 | 7号墓室の応答 | サー2機 |
| 図4 | 日守地下式横穴墓群第1調査区 | 立坑(実線)・墓室(波線)と推定復元の墳丘 | 方眼は5mメッシュ |
| 図5 | 日守地下式横穴墓群第1調査区 | 300・700メガヘルツのスライス平面図 | |

版 圖

line11



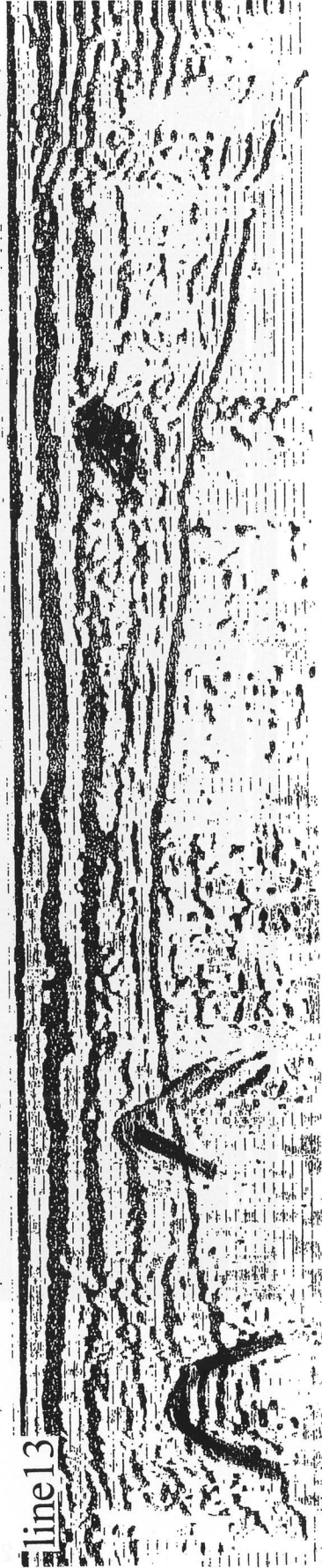
line12



S

N

line13

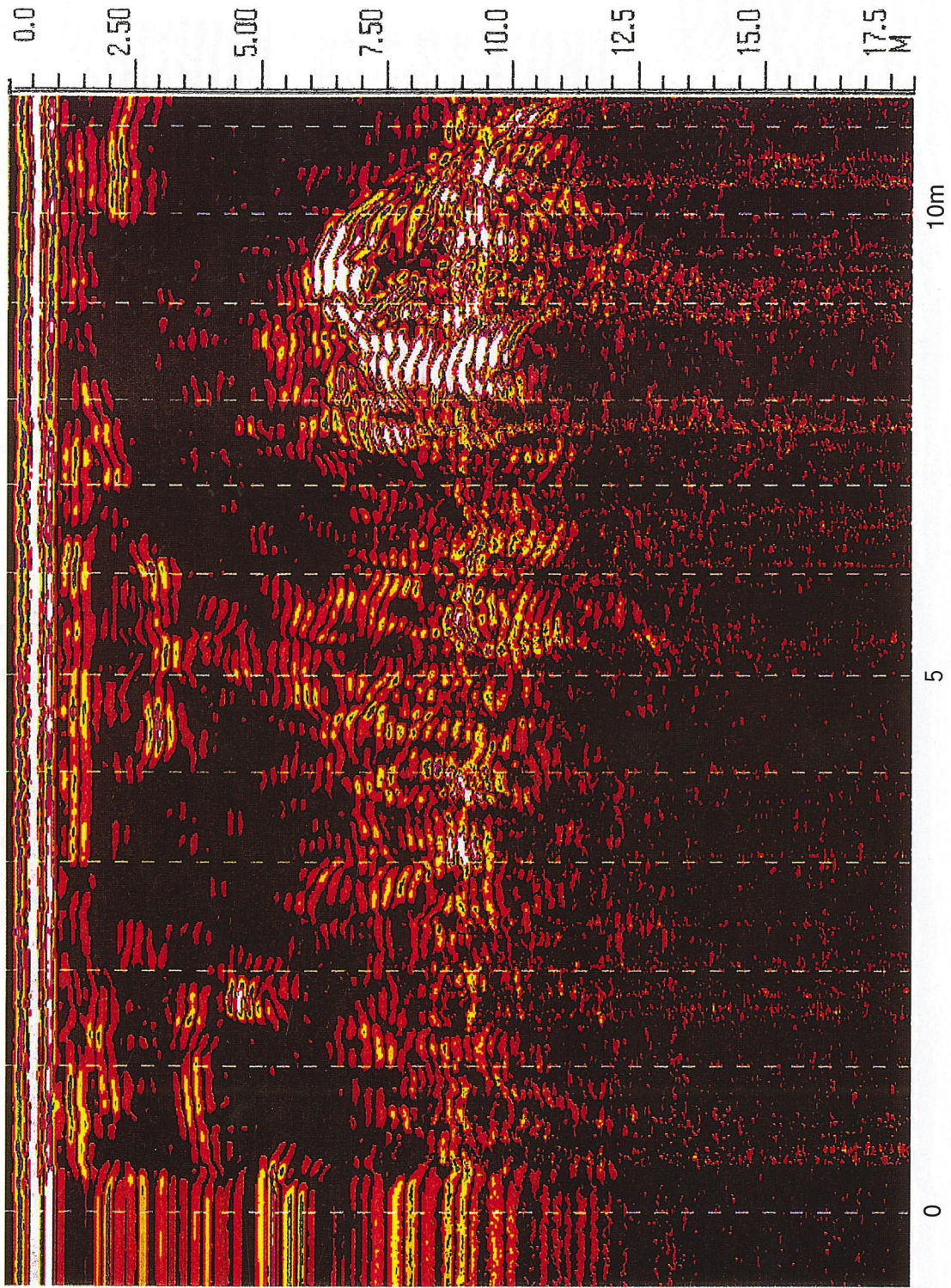


第1図 日守地下式横穴墓群第1調査区 ジオレーダによる断面図

Himori file-36a

3号墓室

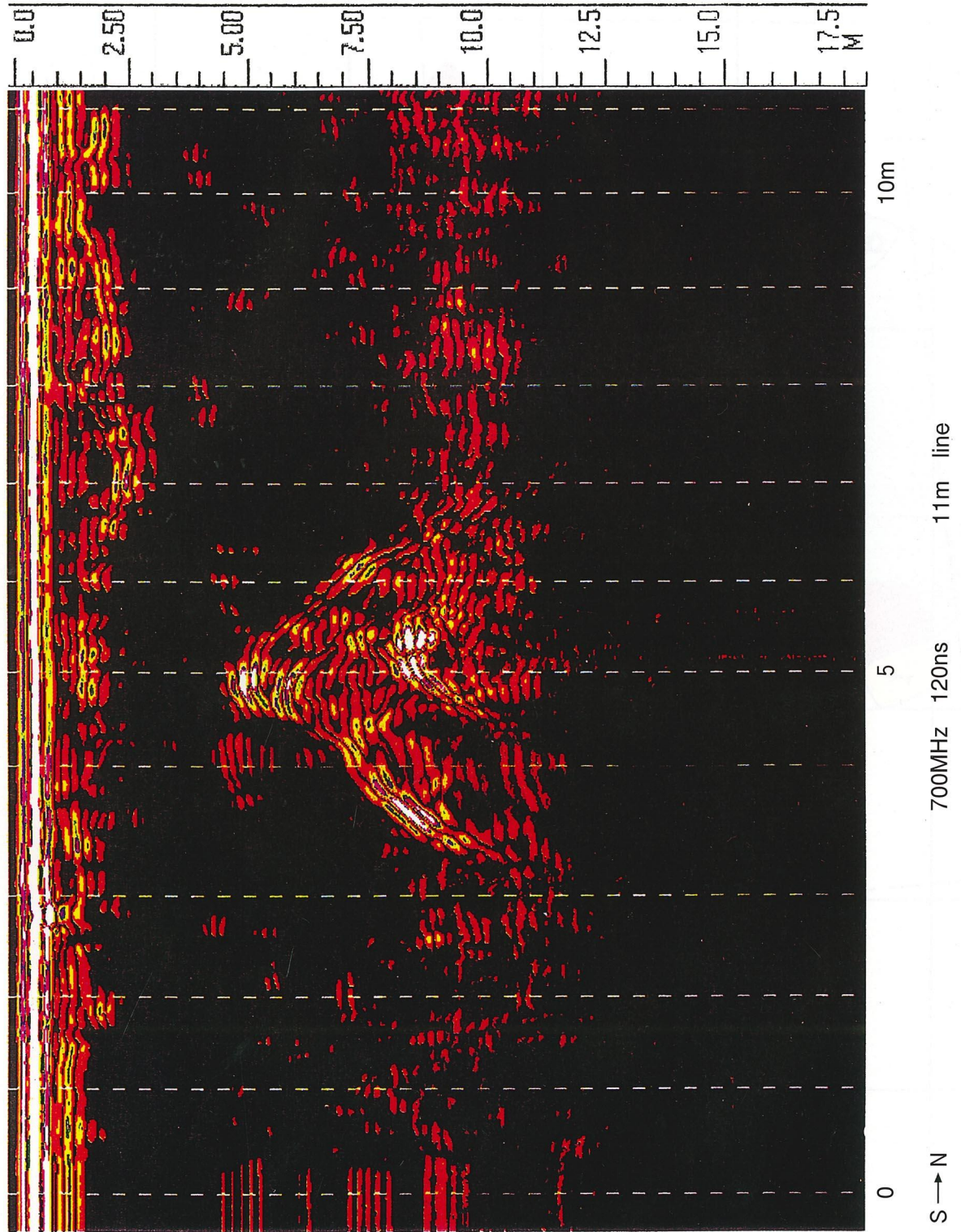
4号立坑



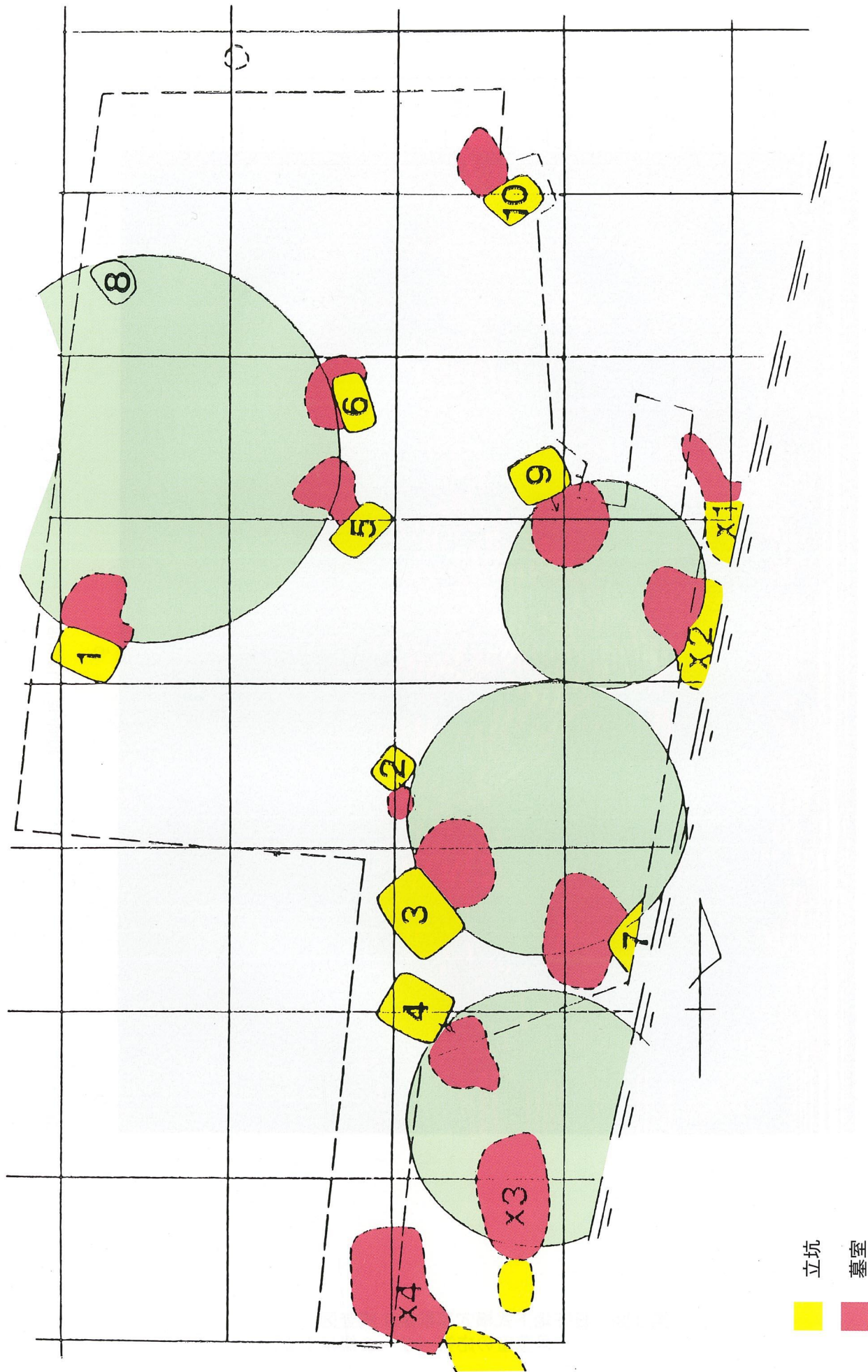
第2図 日守地下式横穴墓群第1調査区
4号立坑と3号墓室の応答 (サー2機による)

Himori file-336a

7号墓室

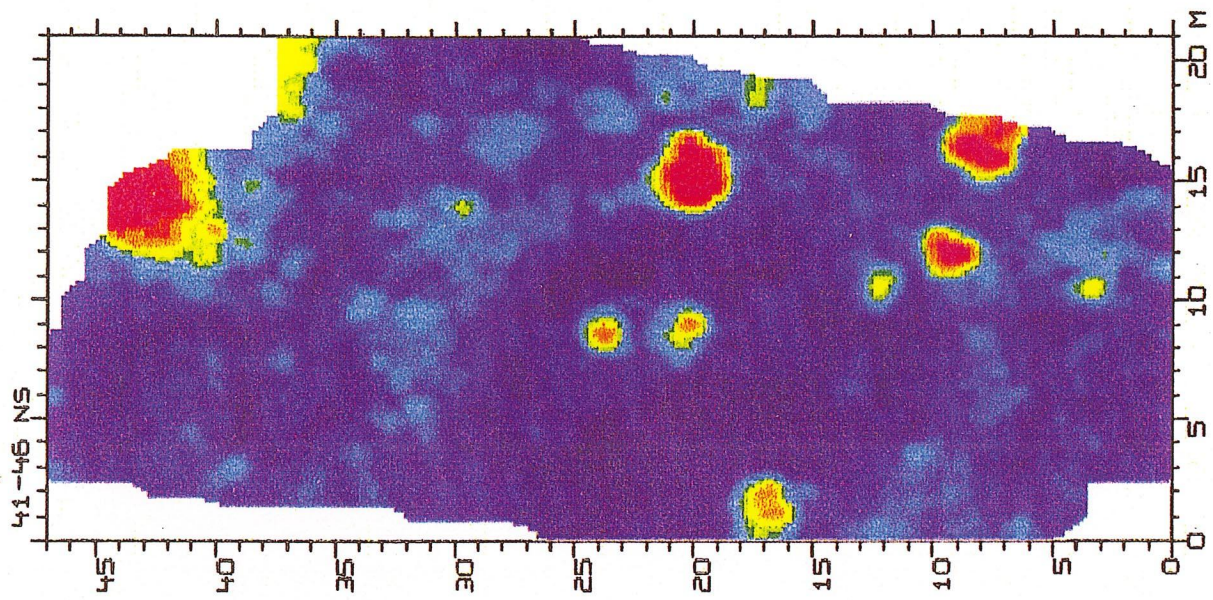


第3図 日守地下式横穴墓群第1調査区
7号墓室の応答 (サー2機による)

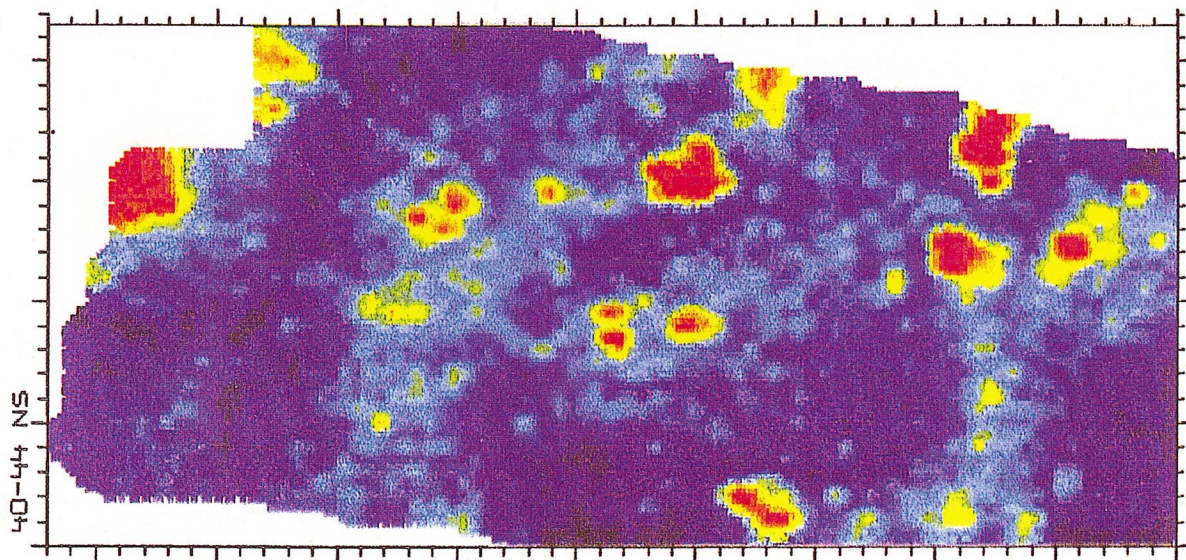


第4図 日守地下式横穴墓群
立坑・墓室と推定復元の墳丘 (方眼は5mメッシュ)

300MHZ North South Profiles - Krig



700MHZ North-South (Krig)



第5図 日守地下式横穴墓群
300・700メガヘルツのスライス平面図

版 圖

調査前の状況



図版
1

調査前の状況
(97-1号墓)

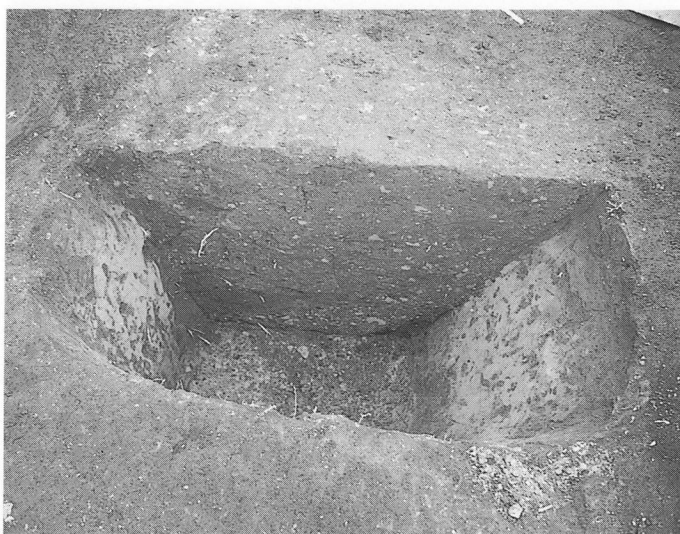


97-1号墓竪坑検出(1)





97-1号墓豎坑檢出(2)



97-1号墓豎坑
土層断面状况



97-1号墓豎坑完掘状况

蛇行劍出土狀況



劍出土狀況



鐵鏟出土狀況





97-2号墓豎坑
検出状況(1)



97-2号墓豎坑
検出状況(2)



97-2号墓羨門
閉塞状況



97-1号墓 出土遺物

